



パロディ「山月記」

現代文では『山月記』をやっていることだろう。主人公李徴が、己の内なる「臆病な自尊心」・「尊大な羞恥心」という猛獣を飼い太らせてしまった結果、自分の外貌をもそれにふさわしいものへと変えてしまうという話である。いわゆる「変身譚」であるが、人間が虎になるという設定の面白さ、また、その背後にある人間性に関わるテーマが、普遍性を獲得している故であろうか、パロディの題材として使われることもある。

今では付録付き雑誌で有名な宝島社であるが、昔は「宝島」というポップカルチャーマガジンを出していた（現在は休刊中）。そして、時々「別冊宝島」という特集号が発売されたのだが、その中に1989年に発売された「珍国語」という、文部省（＝当時）の検定国語教科書をパロディ化した号があった。その中に、この『山月記』冒頭部分のパロディが登場するのである。

実は私はこの号を買って持っていて、今回この通信を書くに当たって探してみたのだが、どうしても見つからないのである。古本屋でもめったに見かけないので悔しい限りであるが、このパロディは結構有名らしく、ネットで検索したら出てきたので紹介しよう。

*

作詞家A、謎の失踪！

一部ではすでに発狂したとの噂の中で

一九七〇年代後半、作詞家Aといえば、歌謡界ではヒットメーカーとして確固たる地位を築いていた。演歌からポップスまで、レパートリーの広さでは右に出るものがなく、レ

コード大賞をはじめとする数々の賞を獲得し、鬼才として名を馳せていた。それがどういう訳か、この売れっ子作詞家という身分に満足できなかったようで、突然作詞家休業宣言をしてしまった。何んでも、純文学の世界で後世に名を残したいとか。そういえば、Aはもともと某大仏文科出身で、在学中小説家を志して中退したという経歴をもっている。青春の夢が捨て切れなかったのか、レコード会社や事務所の忠告も無視し、ひとり山へ引きこもってしまった。本人の説明では、詩作と小説書きに没頭したいから、ということであったが。（今にして思えば、そもそも、これが悲劇の発端であった。ある筋によれば、この山にこもった二年半の間、芥川賞をはじめありとあらゆる公募に手あたりしだい作品を送りつけていたということだ。ところがどっこい、世の中そんなに甘いものではない。候補に上がったのはなんと直本賞と角川推理賞だけであった。そして、結局は直木賞も逃がし、実際にとれたのは、角川推理賞だけという不本意な結果に終わった。こんな状態では（純文学にこだわっていたのだから）、もともとプライドの高いAとしては焦らないはずがない。それに加えて、休業宣言、生活の方もだんだんと苦しくなって、かなり追いつめられていたようだ。

一時は、銀座のホステス、新人歌手、引退女優と、なかなかのプレイボーイぶりを見せていたAも、だんだんとデビュー当時のキザな面影は消え、近寄りがたい風貌になつていたという。（次号に続く）